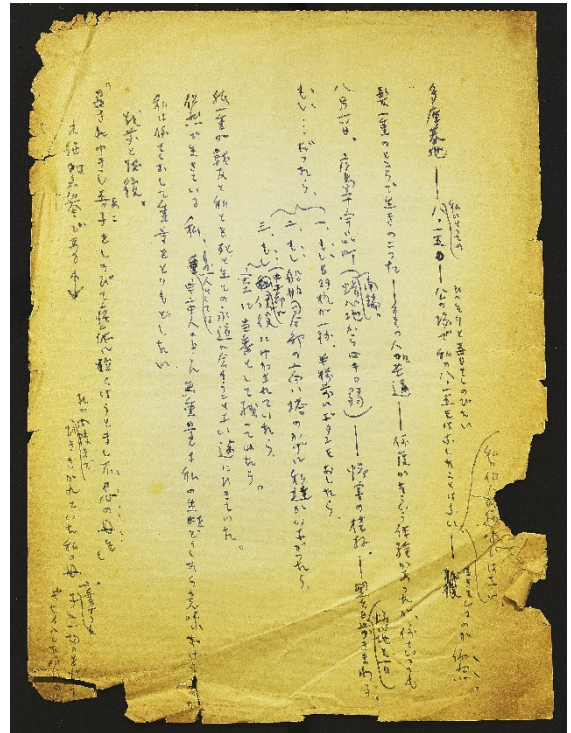


(8) 被爆と敗戦

陸軍船舶司令部で国際情報に触れていた丸山は、ポツダム宣言の内容も受諾前に把握していた。宣言が示していた敗戦後の日本の改革方針のなかで特に丸山に感銘を与えたのは、軍国主義の駆逐や民主主義的傾向の復活強化ではなく、「言論、宗教および思想の自由ならびに基本的人権の尊重」であった。

1945(昭和20)年8月6日朝、広島市中心部にアメリカ軍機が原子爆弾を投下したとき、丸山は点呼朝礼のため船舶司令部の広場で整列していた。すぐ前に立っていた司令部の塔が熱や爆風をさえぎったために難を逃れたのである。原爆投下の翌々日には一日中市内を歩き回ったが、放射能についての知識はなかったという。被爆者健康手帳を交付される資格をもっていた



が、申請はしていない。それは、自分は「広島で生活していた人間というよりも、至近距離にいた傍観者」だったという意識からであった。(画像：丸山が被爆体験をはじめて語った1965年の八・一五記念国民集会での発言メモ〈丸山文庫資料番号637-2〉)

9月12日に召集解除となり、14日に復員。このとき丸山は31歳だった。軍隊での経験も糧にしながら、精神構造から日本を分析する思想史研究者としての歩みがここからふたたびはじまった。